

仏壇返し

川崎ゆきお

仏壇返し

ビジネス街の中に民家が残っている。普通の家だがかなり古い木造家屋だ。

貞は一人で住んでいる。夫の遺産と年金で生活は苦しくない。

貞がそれに気づいたのは二回目だ。夫の位牌が反対側を向いていた。もう死んで十年以上になる。

仏壇はその時買った安っぽいものだが、粗末にした覚えはない。

月参りに来たお寺さんに、そのことを話してみた。まだ若い坊さんだ。

坊さんは位牌が勝手に反対側、つまり背を向けるとは考えにくいので、貞の思い違いではないかと判断した。

貞は納得した。気味の悪い話なので、ずっと黙っていたのだ。しかし二回続くと不安になったのだ。

しかし翌日、また動いていた。

貞はたまらずお寺さんに電話した。

若い坊さんも興味をもったようで、調べてくれた。

坊さんは仏壇に耳をあて、じっと何かを聞いている。

坊さんは地下鉄のホーム拡張工事で、この家のすぐ横にある幹線道路の下を掘っているため、その振動で位牌が動くのではないかと説明した。

貞も地下鉄工事のことは知っており、夜中に耳鳴りのような音が聞こえるので、振動が原因かもしれないが、それなら他のものも動くはずだ。

若い坊さんは、仏壇の構造が共振しやすい箱型で、しかも滑りやすい台の上に位牌が乗っているからだという。

貞はそれで納得した。

しかし、気味が悪いので、位牌を寝かせた。

翌日の朝、見ると位牌は動いていなかった。

その翌日、貞はお寺さんに電話した。

若い坊さんは部屋に入った瞬間、棒立ちになった。

仏壇が裏を向いていたのだ。

仏壇が振動で回転するスペースはなかった。家具と家具の間に置かれており、しかも畳の上だ。振動で動くはずがない。

若い坊さんは、貞を見た。

貞は目を伏せている。

「お婆ちゃん、元気ですねえ」

「はい、お陰さんで」

若い坊さんは仏壇をそっと手前に引いた。

意外と軽かった。